

(抄訳)

「香水をつける:人類の行為」のシンポジウムにおける講演;「大地から天上へ;香りと儀式」

2014年10月17日

ユネスコ日本政府代表部大使

門司 健次郎

香水の都であるグラスで開催される本日のセミナーに参加できるのは光栄であり、招待いただき感謝。38年前にモンペリエで研修した際に訪ねることができなかったので、非常に嬉しい。本日は、日本の香文化、特に香道を中心にお話し、香りを巡る最近の日本の状況についても触れることとしたい。

香は6世紀に中国から仏教伝来とともに伝えられたが、日本人と香りの出会いが記録として残されているのは、約1400年前の595年のこと。日本最古の勅撰の歴史書である日本書紀に、日本中部の島の浜辺に漂着した木を漁師達が他の木と一緒に焚火にしたところ、何ともいわれぬよい香りがして驚き、朝廷に献上したとの記述がある。

7世紀以降、仏教は国家宗教となり、香は、供香(祈りの香)として仏教行事に用いられ広まった。具体的には、焼香、線香等であり、これらは現在でもごく一般的に用いられており、日本人は、これらの香をかぐと敬虔な気持ちになる。例えば、東京の観光地で有名な浅草の浅草寺では、境内の大きな炉で香を焚いているが、その煙を痛いところに当てると治ると言われ、多くの人が様々な部位に当てている光景が見られる。私も頭に当てていたところ、家内からは脳だけでなく顔にも効きますようにと言われた。

9世紀末からの平安時代には、京都の宮廷を中心に空薫物として、部屋や衣装に香をたきしめる風習が盛んになり、上流階級の人々は暮らしの中で香りそのものを楽しむようになった。その様子は、世界最古の女流長編小説である「源氏物語」(1008年頃)や同じく女流作家のエッセイ「枕草子」(1000年)にも描かれている。一節を引用したい。

心ときめきするもの

心ときめきするもの 雀の子飼ひ。ちご遊ばする所の前わたる。よき薫き物たきてひとり臥したる。唐鏡の少しくらき見たる。(中略) 頭洗ひ、化粧じて、かうばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にてても、心のうちは、なほいとをかし。(後略)

また、香を調合して独自の香を創り出しその優劣を競う「薫物合わせ」という遊びも貴族たちによって行われるようになった。香は、彼らの知性・感性及びそれに基づく美意識の

表現の手段でもあったのである。

そのために用いられたのが練香である。春夏秋冬の季節になぞらえた処方が 6 種の薫物として書物に収められており、基本の比率に微調整を行い、オリジナルの香りを創り出すことが行われていた。練香は、茶道においても炉の季節に焚かれる香として現代に継承されている。また、衣装に香を移すための伏籠も貴族たちの必需品であった。

そして 11 世紀末から武家社会が始まると、香の嗜好も変化し、複雑で濃艶な香りから清楚優雅な香りを聞くようになり、室町時代、足利義政将軍時の東山文化の頃(14 世紀)には一定の作法やルールが作られ、香木を焚いて香りを鑑賞する遊びとしての香道が確立された。香道は、香りを日本人の四季への感性や文学詩歌と関連付け体系化した世界に類のない香りの芸道である。この頃、それぞれに異なる香りを有する香木の分類法である「六国五味」なども体系化された。香道は、御家流（三條西流）と志野流が中心となって今日に至っている。

なお、今日の日本文化を代表する茶道、華道、能楽などが大成したのもほぼ同時期のことである。

香道では、小型の香炉の灰の中に小さな炭火を埋め、その上に雲母板を置き、そこに小片の香木をのせて暖め、立ち上る微かな香りを聞く。何種類かの香木を用いて組香を作り、香席で順に回して香をかぎ分け、香の組み合わせを当てたり、香を 1 つずつ順番に回してその名前を当てたりして楽しむ。Grasse の香水博物館には、香道のための道具が展示されていると聞いており、香りに関わる方の中には、香道に詳しい方もいらっしゃると思うので、実は私は全くの素人であることを申し上げておかねばならない。

私が参加したことのある組香では、3 つの組香を順に聞き、どれとどれが一緒か、3 つとも違うかを当てるものであるが、微妙な香りの違いをかぎ分け、それを記憶しておくことはなかなか困難であった。

源氏香という最も洗練され人気のある組香は、5 種類の香をそれぞれ 5 個同じ包装で用意し、計 25 個の中から任意に 5 つを取り出し、それを順番に聞いて行って組み合わせを当てるものである。全部が同じ香りになることもあれば、5 つバラバラになることもある。可能な組み合わせは 52 種類であり、その解答は、5 つの香に対応する 5 本の縦線の中で同じ香りのものを横線で結ぶことにより表される。この 52 種類の組み合わせは、源氏物語の 54 帖のうち 2 つを除いた 52 帖に対応させられ、その名前と呼ばれる。この源氏香の表記は、着物や帯、重箱、和菓子の模様としても用いられている。

ここで香十得という香道の 10 の功德を紹介したい。

感覚を研ぎ澄まし
心身を正常にする
よく汚れを除き
よく眠気を覚ます
静中に友となり
多忙な時に心を和ます
少なくとも足りる
年月を経ても朽ちず
常用して障りがない

西洋において香りは香水という液体の形で発展したが、日本においては、香りは個体として暖めるという形をとった。Parfum の語源がラテン語の *Per fumum : par fume* であることに鑑みれば興味深い。

江戸時代(17世紀～19世紀半ば)に入ると、庶民が香料を化粧に用いるようになり、匂い袋、香炉、香枕などが人々の生活に浸透していった香りが身近な存在となった。香道の人気は、江戸時代中期江戸初期に頂点に達した。しかし、江戸末期から明治初期(19世紀後半)には、封建社会の崩壊、開国及び西洋化により、他の伝統的芸術と同様、香道には停滞の時期が訪れ、香道の2つの主流流派が人々に教えを再開したのは1960年代初期のことであった。今日、香道の復興及び海外における高い関心もあって、日本では香りのブームが到来しており、海外からもたらされた香水を始めとする香りと日本古来の香りは、日本の日常生活の中に浸透している。

せっかくグラスを訪問しているので、日本への香水の導入についても触れたい。外国の香水が紹介されたのは19世紀後半であるが、既に1872年に *Eau de cerisier* が初の洋風香水として発売され、その後も、牡丹、黄菊、梅花、藤花といった香水が続いている。これらの命名は当時の日本人の嗜好を反映したものであろう。

グラスは、香水の研修生の受け入れ等により、日本の香水産業の発展に大きな貢献を行ってきた。最初の日本人は、20世紀初めに来た甲斐庄楠香(Tadaka Kainosho)であり、帰国後しばらくして1920年に彼の設立した会社は、現在、Takasago International Corporationとして従業員3000人、27か国に展開するグローバル企業となっている

最後に、今日の日本における香りの地位について触れたい。専門家によると、日本は高温多湿であること、魚と野菜中心の食生活で日本人は一般に体臭が少ないこと、多くの人が毎日入浴(シャワーではない)すること、着物は香りがこもりやすいこと等に鑑み、日

本人の香の嗜好は欧州のそれとは異なっており、日本の香水の市場規模は継続して \$ 400～500 百万ドルと圧倒的に小さい由である。しかし、嗜好の差は縮まってきているとのことであり、また、2008 年より衣類の洗濯時に用いる柔軟剤の爆発的ブームが起こっており、2013 年の市場規模は 10 億ドル に達したとの報道も見られた。この人気は続いており、各メーカーとも多くの新製品を投入している。2 種類以上の柔軟剤を使う主婦は 60%にのぼり、自分で香りをブレンドする消費者も出てきているという。

これは、身体につける香水ではなく、香りを衣装にたきこむという平安貴族からの伝統に基づく香りの使い方と思われる。

使い方はともかく、香りは現代の日本においてもフランスと同様、重要な地位を占めており、生活の中に根付いている。香り付きグッズも多く、香り付きのボールペン、消しゴム、レターセット、ポストカード、USB といった文房具や日本人の殆どが携帯に付けるストラップなども出てきている。

香水、arome の先進国であるフランスとの香りの分野での協力が進むことを期待する。そして、グラーズの香水がユネスコの無形文化遺産に登録されるようお祈りして講演を終えたい。

この「香水をつける:人類の行為」と題するシンポジウムにおける講演で、香りと人類の分かちがたい関係について触れてきた。Parfum 無くして人類は存在せず、人類無くして Parfum は存在しないとも言い得よう。「グラーズ地方の香水のノウハウ」のユネスコ無形文化遺産リストへの登録に向けた努力の成功を信じている。

最後に、無形文化遺産保護条約が作成されたのは、松浦前ユネスコ事務局長の下であり、日本政府はこれを強く推進した。なぜなら、日本では、既に 1950 年代から 1 つの法律の下で有形文化遺産と無形文化遺産の双方を保護してきたからである。個人的に、無形文化遺産条約の重要性を強く認識しており、本件の登録は、無形文化遺産リストの幅を広げるものである。改めて皆さんのご成功をお祈りして講演を終わることとしたい。